

令和4年度文京区内大学学長懇談会  
議事録

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

令和4年度文京区内大学学長懇談会  
会議次第

日時：令和4年12月12日（月） 14:30～16:26

場所：文京シビックセンター26階スカイホール

- 1 開会挨拶（文京区長）
- 2 報告事項  
大学学長講演会実績及び区内大学と区との連携実績
- 3 懇談・意見交換  
テーマ『大学におけるDXの推進状況について』
- 4 閉会

○アカデミー推進部長 皆様、こんにちは。

オンラインで御参加いただいている皆様、私の声が聞こえておりましたら、手を挙げていただいてもよろしいでしょうか。

(出席者挙手)

○アカデミー推進部長 それでは、定刻となりましたので、ただいまから「令和4年度文京区内大学学長懇談会」を開催させていただきます。

本日はお忙しいところ、皆様に御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日の司会進行を務めさせていただきます、アカデミー推進部長の高橋と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、お手元の次第に沿って進めさせていただきます。

まず、報告事項として区から御報告をさせていただきます。その後、懇談、意見交換に入ってまいります。

本日のテーマは「大学におけるDXの推進状況について」でございます。忌憚のない御意見をいただければと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、会議に先立ちまして成澤区長より御挨拶申し上げます。

○区長 皆さん、こんにちは。区長の成澤でございます。

本日は、12月の非常に御多用のところ、区内19大学のうち、18大学の学長の先生方にお集まりをいただきまして、ありがとうございます。また、オンラインで御参加いただいている先生方、ありがとうございます。

毎年、この学長懇談会はお正月に開催をしておりましたが、去年はオンライン開催、そして、一昨年はコロナ感染拡大防止のため中止、今回は、日程の関係で年末開催となりました。年末に開催してよかったなと思ったのは、今日、日本薬科大学さんからお屠蘇をいただいて、これはお正月だともう使えないので、年末開催してよかったかなとつくづく思っております。

去年は環境対策について意見交換をさせていただきまして、おかげさまで区内の幾つかの大学でお話合いが始まり、食品ロスについての取組を共同で行おうではないかという動きが現在始まっているところでございます。

失礼な言い方でいつも恐縮しているのですが、文京区にとって区内19大学は区内最大の産業であって、私たちにとってなくてはならない大学でございます。それがCO<sub>2</sub>発生源としての意味もあるということで、このように今回食品ロスということが1つのテーマであります。ともに手を携えて事業をスタートするべく御議論いただいているということを変感謝している次第です。

今日は大学におけるDXの推進ということでございます。東京大学周辺にはAIの集積が始まりつつありますし、これは学内ではなくて、学外に、今、AIインキュベーション等が数多く出てきています。また、東京ドーム周辺も再開発が予定されていますが、東京ドームの再開発のキーワードは、Web3.0でありメタバースであると言われております。このように

様々な社会変革の中で、我々自治体も区民サービスの向上という面でのDX、そして、我々の業務改善としてのDXも重要ですが、教育の現場でも、様々な形でDXへの対応が求められるだろうと認識をしている次第です。今日はそれぞれの大学でのお取組について知見を御披露いただき、参考にさせていただきたいと思います。

この間、コロナの拡大によって大学との連携事業も縮小傾向にございましたが、去年は、令和3年度90事業に比べて、今年は108事業と拡大をいたしております。今日、先ほど発表された今年の世相を表す漢字は戦争の「戦」、戦いという字だそうです。ウクライナ紛争等があり、その文字が選ばれたと思いますが、ウクライナからの避難民への対応等についても、各大学の皆さんたちに御協力いただいて、いろいろな対応ができていることを感謝申し上げる次第です。

ウクライナからの避難は、全国的には2,000人を少し超えるぐらいと言われていますが、そのうち500人が東京都内におります。何とその500人のうち約1割は実は文京区におります。その多くは東京大学、そして、順天堂大学が組織を挙げてウクライナからの避難民の学生さんたち、研究者たちを受け入れ、約50人近い避難民を文京区が受け入れているということにつながります。東京都全体に占める文京区の人口のシェアは2%弱ですから、避難民の数がいかに文京区に集中しているのかということもよく分かるわけですが、これも区内大学等の研究機関が多いということがその数字に表れていると思います。

こういった特性を今後とも生かして、まちづくりや区民福祉の向上のために大学の皆様方とも相互に協力し合えることをさせていただきたいなと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。限られた時間でございますが、最後までどうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

○アカデミー推進部長　ここで、本日出席しております区の職員を御紹介させていただきます。

まず、佐藤副区長でございます。

加藤教育長でございます。

大川企画政策部長でございます。

横山企画課長でございます。

矢島アカデミー推進課長でございます。

どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

なお、本日の懇談会につきましては、区ホームページへの掲載等がございますので、写真撮影、また、会議録作成のための録音をさせていただきたいと存じます。御了承のほど、よろしくお願ひいたします。

なお、会議録につきましては、案の段階でお目通しいただくことを予定しております。重ねてお願ひ申し上げます。

それでは、アカデミー推進課長より、区と大学との連携実績等について御報告させてい

たきます。

○アカデミー推進課長 それでは次第の2「報告事項」でございます。学長講演会及び大学と区との連携実績でございます。

まず、資料1でございます。

今年の学長講演会は、跡見学園女子大学の小仲学長に、生誕150年を迎えた樋口一葉についての御講演を頂戴いたしました。跡見学園女子大学内のブロッサムホールにて開催をいたしまして、86人の参加がございました。

また、資料2が連携実績となっております。

先ほど区長からもございましたとおり、令和4年度は108事業の連携実績となっております。件数のみで実績ということにはならないのですが、令和元年度が122件ございました。令和2年度が94、3年度が90、今年は、まだ3か月残しておりますが予定としては108となっております。回復基調にあるものと考えております。

また、この区内大学学長懇談会も、資料2の1ページ目のNo.7に記載をしております。こちらでも多数の連携事業を生み出した重要な地域連携のプラットフォームとして重要な位置づけを担っていると考えてございます。

また、その下にNo.8でございますけれども、地域連携担当者会議でございます。こちらは、それぞれの大学の地域連携担当の御担当者様と、今年2回の会議を行ってございます。また、会議では、各大学の事務担当者、防災担当者、生涯学習担当者、国際交流担当者、それぞれの御連絡先を共有させていただくということもしてございます。

また、新規の事業でございますけれども、表中の一番左の列に「新規」と記載しているところでございます。主な新規の事業といたしましては、今年、生誕160年、没後100年を迎えました文京区ゆかりの文人である森鷗外に関する事業、それから、平成7年には、文京区にも児童相談所の開設を予定しておりますが、児童相談所の関係の事業、それから、昨年度のテーマでございました環境関係、また、御挨拶にもありましたウクライナ支援に関する事業等がございました。後ほど御確認をいただければ幸いです。

御説明は以上でございます。

○アカデミー推進部長 説明は以上でございます。

それでは、引き続き、意見交換に入らせていただきます。

本日のテーマは、繰り返しになりますが「大学におけるDXの推進状況について」でございます。テーマあるいは令和4年度の連携実績などについて、大学ごとに御意見を賜りたいと存じます。御発言は貞静学園短期大学様が15時までの出席となりますので、冒頭御発言いただき、その後、出席者名簿順に跡見学園女子大学様から御発言いただければと存じます。

大変恐縮でございますが、時間の都合もございまして、お一人様3分程度でお願いできればと存じます。オンラインで御参加いただいている場合は、御発言の際、Zoomのミュートを解除してから御発言をお願いしたいとお願いいたします。また、発言が終わりまし

たら、再度ミュートにさせていただきますようお願いいたします。

また、事前に参考資料を御送付いただきました大学様については、事務局で画面共有をいたしますが、資料も席上に配付をしております。資料本文には右肩に数字を手書きで記載しておりますので、資料の目次と照らし合わせて確認をいただければと存じます。よろしくようお願いいたします。

それでは、貞静学園短期大学学長、吉田様、お願いいたします。

○貞静学園短期大学 ただいま御紹介にあずかりました、貞静学園の吉田と申します。

実は2年前に筑波大学を定年退職し、2年間の他大学の教授を経て、4月から貞静学園のほうに勤務しておりますので、この皆様方の集まりに初めて参加いたします。

それで、様子がよく分からないうえに、発表順のトップで話さなくてはいけないので、どういうことを話すべきか大変迷っているところなのですが、御存じのように、本大学は保育・福祉を専門にしている短期大学ですから、どちらかというAIが発展してもむしろ残るような職種であるという特徴がありまして、今日の話題に対してなかなか積極的な提案ができるような立場ではございません。

しかし、せつかくの機会ですから言わせていただくなら、大学における対面指導を大事にしていますが、一斉指導とか一斉授業のようなときに、例えばAIを使いながら、特に、けがのために学校に来れなくなったとき、あるいは教育実習や保育実習の前に感染のリスクを減らす意味で、オンラインを使って学生たちを指導するという形で活用しているぐらいで、私たちとしては、皆さんに参考になるような提案もできないのです。けれども、ただ言えることは、何らかの問題が身に起きた学生さんに対して、個別最適化とはいきませんが、そういう学生たちを取りこぼさないようにオンラインを活用しているということが私どもの現状でして、皆さん方のいろいろな提案を今日は時間がある限り聞かせていただきたいと思っております。

以上です。

○アカデミー推進部長 吉田様、ありがとうございました。

続きまして、跡見学園女子大学学長、小仲様、お願いいたします。

○跡見学園女子大学 小仲でございます。

私どものDXについて言えば、まだ緒に就いたばかりというのが実態です。今日御出席の東洋大学さんなどは、既にDXの推進について基本的な計画を策定され、それに基づいて様々な事業を行っていらっしゃる。ほかにもそういう大学さんがあるわけですが、私どものところでは、まだそういった推進計画のようなものを策定しているわけではありません。

しかし、一方で、現実にはDXを避けて通るということを許してくれませんので、個別の案件が出てきたときに、それぞれ対応しているというのが現状です。これから大学としての全体的な構想をどう立てていくのか、どこまで本学でできるのかという辺りを吟味していかなければいけないと考えているところです。

学習面で言いますと、このコロナ禍によってどこの大学でもオンライン授業を導入して

きました。もちろん、本学でもオンライン授業を積極的に取り入れ、そして、会議などもオンラインでできるような形を取ってまいりました。

現在、来年の4月運用に向けて取り組んでいるのは、学習成果の可視化に向けて、学習ポートフォリオをどういう形で導入するかということを検討している段階です。これが出来上がると、学習面における新しいワンステップになるのかなと考えております。ただ、DXが本来目指すべきところはその先であって、集積したデータを解析し、さらなる質の向上を目指さなければいけないわけで、そこにはまだ手がついていないというところなんです。

一方、ネットワークの強化ということでは大分力を入れてやってまいりました。実は私どもは、茗荷谷と埼玉県の新座市に2つキャンパスがあるものですから、これまでも、なかなか両キャンパスをつなぐということができにくかった。コロナ禍によってオンラインを活用し始めてから、そここのところの問題が幾分解消してきたと思っております。

事務部門でも、事務の効率化を目指して、少しオンラインの活用というのが進んでいるところなのですが、ただ、職員のテレワークとか、あるいはフレックスタイムの導入であるとか、そういうところまではなかなかいっておりません。

授業、教員のほうはオンライン授業をやれば済むわけですが、残念ながら、職員、事務レベルで言うと、会議はオンラインでできても、実際の業務となると、コロナ禍においても出校してやらなければいけないというのが現実で、そういう環境の中で、どこまでオンライン化といいましょうか、業務の効率化、デジタル化ができるかというのが今後の課題かと思えます。

取り組んでいかなければならないことがたくさんあるのですが、私どもの大学のような規模においては、今後、DXを推進していくに当たっては、1つ大きな課題として、やはり人材をどうするかということ、それから、どこまでコストをかけられるかという問題が大きく立ち上がってくる可能性があると思っております。

今日は先進的な取組をされている大学さんもたくさんご出席ですので、その取組の様子を聞かせていただいて、参考にさせていただければと考えております。

以上です。

○アカデミー推進部長 小仲様、ありがとうございました。

続きまして、お茶の水女子大学学長、佐々木様、お願いいたします。

○お茶の水女子大学 皆様、こんにちは。

私からは産業DXを牽引するデジタル人材の育成ということで、お話をさせていただければと思えます。

お茶の水女子大学は、文教育学部、理学部、生活科学部の3学部の14学科、学部生約2,000名の小規模ながらも総合大学です。アメリカのセブンシスターズと言われていた女子大学とほぼ同じような規模となっておりますけれども、本学にはリベラルアーツ教育を大事にしており、大学院もございまして、大学院は1研究科6専攻で学生数が約800名ということでございます。文京区とともに運営するこども園、そして、ナーサリーから大学院までが

1つのキャンパスにあるということが本学の大きな特色となっております。

本日、デジタル人材ということですが、女性デジタル人材の育成とともに女性工学系人材が現在求められており、本学では2年後の2024年度に工学系学部を新設する予定でございます。

本学では1990年に理学部にデジタル人材育成の基礎となる情報科学科が新設されました。そこでは、人数は本当に少ないのですが、40名程度の学生を毎年教育しております、その7～8割が大学院への進学をいたしております。

女性の進出が遅れているという情報系の分野で、基礎から応用までの力を持った学生が毎年40人ずつ本学から卒業するというので、就職状況は、おかげさまで抜群の就職状況が続いております。また、設置後、まだ30年程度の若い学科ではありますが、既に業界リーダーや研究者として一線で活躍するOGも増え始めているところでございます。

次のスライドでございますけれども、2019年6月に文理融合AI・データサイエンスセンターを設立いたしました、先ほど情報科学科という学科のことでしたけれども、これは全学生を対象にしたデータサイエンスに関する教育研究を開始しております。このプログラムは、文部科学省のリテラシーレベルの認定を受けているものでございます。

次のスライドをお願いいたします。

こちらのスライドは、現在、どこの大学もそうだと思いますけれども、デジタル社会に対応した一層のカリキュラムの高度化が求められている中、本学では、ちょっと長いタイトルなのですが「ゲームチェンジにより『クリエイティブ生活産業DX』をけん引する女性アントレプレナーの育成」ということで、今年度は、1億円の補助金をいただきまして、本学のDXを推進するという意味で、いろいろな設備も整えております。

そして、このプログラムでは、DXテクノロジスト、DXストラテジストの2種類の人材の養成を行って、デジタルと生活科学、そして、お茶大生の視点をかけ合わせ、女性視点によるクリエイティブ生活産業DX推進を目指すことを目的といたしております。

スライドにはないのですが、最後に、本学の理系女性育成啓発研究所では、日本の理工系女性人材の層を厚くするというので、すぐということではもちろんなく、初等中等教育において女子生徒が理工系分野に興味や関心を抱くように、ナッジするというか、そういう取組を行っております。ここでもVR体験セミナーなど、デジタル技術やDXへの興味関心を小中高生時代に涵養し、女性デジタル人材の育成に努めるということをお茶大では取り組んでおります。

ただ、先ほどからお話のあった大学全体、特に事務組織でございますけれども、DXという部分に関しましては、まだ本学も課題のあるところでございますので、本日のお話を参考にさせていただいて新たに取り組んでいきたいと思っております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 佐々木様、ありがとうございました。

続きまして、国際仏教学大学院大学学長、藤井様、お願いいたします。



○国際仏教学大学院大学 藤井でございます。よろしくお願いいたします。

本学は1学年の学生定員が4人で、5年間の修業年限で全学生数20人という単科大学院でございますから、本学の例は特殊なケースではないかと思われまふ。その規模の小ささから、対学生向けサービスや教務情報などに関する業務の効率化について、デジタル化を用いての効率化にあまり迫られていないというのが現状でございます。しかし、大学全体の業務は電算処理によってなされているものですから、この状況を事務分野と教育研究分野に大きく二分して現状を御紹介いたします。

まず、事務分野でございますが、各種委員会、教授会に相当する研究会委員会を筆頭として教務委員会、入学者選抜委員会等、そういった十数種類の委員会がありますが、それら各種委員会の資料、議事録などは全てPDF化しまして、データベース化しており、いつでも取り出せる状態になっています。理事会、評議委員会などの大学運営に関する会議資料、稟議書、各省庁への過去の調査回答などについても同じくデータベース化しており、件名による検索と閲覧が可能になっています。

また、学生の授業履修管理、成績評価結果などもデータベース化して活用して、業務の効率化を図っています。それらのデータベース管理に関わる教職員は、皆、グループウェアを活用して互いの予定等の情報を共有し、ペーパーレスを実現して業務の効率化を図っております。図書館では、ウェブページ、OPACを用いて図書の検索を可能にしておりますし、また、図書館で発行する成果刊行物も常時PDF化して閲覧可能になっています。

次に、教育研究の分野でございますが、教育について、授業の形式はコロナ感染の流行によって対面授業が不可能になった段階でオンラインによる授業に切り替えましたが、全学生と教員にタブレット端末を貸与し、TeamsとかZoomなどのソフトを用いて授業を行いました。現在は対面が基本でございますが、対面とオンラインとのハイブリッド授業も状況に応じて適用しております。

本国では学生数が少ないため、授業の出席・欠席については、教員が手作業によって確認し、集計しています。そのほうが学生の状況を的確に捕捉できるので好都合であります。

次に、研究についてですが、本学などデジタル化による恩恵を被っているものは、教員の個人研究を別にしまして、本学附置の国際仏教学研究所と日本古写経研究所の両研究所であります。前者には、サンスクリット、チベット、パーリなどの仏典記述言語による仏教写本、後者には、奈良・平安時代における古写経写本が蔵されておりますが、それらはデジタルアーカイブ化されて研究に用いられております。特に、日本古写経研究所では、これまで各地の仏教寺院などに赴いて、平安・平安時代の仏教写本を閲覧して、許可を得た後、これを写真撮影し、デジタルアーカイブ化して研究に利用しています。寺院の公開許可を得た写本についてはオンライン上で一般公開をしておりますが、不許可の場合は研究所内においてのみ閲覧可能にしています。手前みそではありますが、当研究所の日本古写経のデジタルアーカイブは世界的にも注目を集め、貴重な文献資料を研究者に提供しております。

以上、記録文書などの保存と利用については、デジタル化による効率化が図られておりますが、それがデジタルトランスフォーメーションと言えるものであるのかどうかは、疑問なしとすることはできません。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 藤井様、ありがとうございました。

続きまして、順天堂大学学長、新井様、お願いいたします。

○順天堂大学 順天堂の新井でございます。

本学におけるDXの進捗状況についてお話をさせていただきます。

まず、教育でございますけれども、これはオンライン授業をアーカイブ化するなどして、教育機会の確保や復習用の教材として提供する、こういったようなことをしておりますが、いわゆる教学DXに関しては十分とは言えておりません。

ただ、医学部におきましては、医学教育のどの部分がハイパフォーマンスな医師の育成につながるか、様々なデータを集積しこれを解析することを始めておきまして、これを全学的に広げていきたいと思っております。すなわち、教学DXが緒に就いたところです。

2番目は、大学業務のDX化でございます。

これはいろいろ、ほかに既にお話ございましたけれども、いろいろな申請や手続をワークフロー化、システムに切り替えるということではありますが、これについては正直申し上げてまだ2～3割程度の到達でありまして、今後さらに推進していく必要があるだろうということです。

3番目は、人材育成でございます。

この文京区の地でございます医学部の医学研究科には、昨年の4月にデータサイエンスコースというものを開設し、修士の育成を図っておりますし、また、文京区ではなくて申し訳ないのですけれども、来年の春には浦安の日の出キャンパスに、健康データサイエンス学部を本学8番目の学部として開設いたします。

その理由、その心でございますけれども、医療・医学におきましては、膨大な臨床データをAI等を用いて解析すると。そこから新しい知見を導き出すという、いわゆるリアルワールドデータの解析の重要性が指摘されておりますが、問題はそれを担うデータサイエンティストがいないということでございます。

また、医学の分野で、これは御承知のとおり、ホールゲノム解析、全ゲノム解析が可能になりまして、ゲノムと疾病の発症の関係あるいは治療との関係が重要になりますが、やはり、これも、これを解析するバイオインフォマティクスが圧倒的に不足をしていると。こういったような人材を育成すべく、大学院医学研究科あるいは新しい学部を設置したということでございます。

最後でございますが、4番目、病院・医療に関してでございます。

既に一部報道もされてございますが、本学は日本IBM社と連携いたしまして、メディカル・メタバース共同研究講座を設置いたしました。産学連携の一環でございます。

この共同研究講座では、メタバース空間で順天堂医院を模して、順天堂バーチャルホスピタルを構築いたします。そういたしますと、来院前に患者さんがバーチャルで病院を体験できたり、あるいは外出困難な入院患者さんが家族や友人と交流をしたり、あるいは実際に医療面で、メンタルヘルスの疾患につきましましては治療的な効果もあるのではないかと、ということが推測されておりました、そういったようなことの学術的な検証を試みたいと思っております。

順天堂からは以上でございます。

○アカデミー推進部長 新井様、ありがとうございました。

続きまして、拓殖大学学長、鈴木様、お願いいたします。

○拓殖大学 拓殖大学の鈴木でございます。どうぞよろしくをお願いいたします。

大学DX化ということですが、DXまでは行っていないというのが現状です。そのための基盤づくりにやっと動き始めたと考えています。

コロナ禍になって、否応なくオンライン授業の導入をいたしました。学内のWi-Fi環境の整備自体も、十分な容量のものをそろえなくてはいけないということで、大きな投資をしたというのが実情でございます。さらには、学生がパソコンを教室に持ち込むということもあって、細かいお話ですが、教室内の電源、コンセント、そういったものを増設するといった対応もここで行いました。

LMSについては、Blackboardを使っておりますが、それも従来どおりでは、今回のコロナ禍において容量が全く足りないということで、大きく容量を増強いたしました。このBlackboardでは、オンデマンド型の授業を展開するための授業コンテンツを格納しておくなど、現在でも活用していますし、今後もこの部分は併用しながら進んでいこうと考えているところです。

また、ハイフレックス型の授業が展開できるように、全ての教室ではございませんが、教室にカメラやマイクの設置もいたしました。

本学は5学部ございまして、文系の2学部がこの文京区の茗荷谷にあり、約5,000名の学生がおります。残り3学部が東京都八王子市にございまして、4,000名の学生が学んでいます。このようにキャンパスが異なるところに2か所ございますので、これらキャンパス間での同一時間帯での同一授業の実施、これがハイフレックス授業によって可能となっているところは、1つの大きなメリットと考えています。

それから、ペーパーレス会議システムを導入いたしました。今年度で2年目になっていきます。タブレットを使用した会議資料の配付であったり共有というものが進んでおります。学部教授会においてもペーパーレス化がほぼ進んでいるところでございます。

しかしながら、例えば入試判定とか、秘匿性の高い審議事項の場合にはオンラインではセキュリティ上の問題が生じるのではとの懸念から、完全なペーパーレス化への移行には課題が多いと考えています。

それから、個々の学生情報の集約ということで、先ほどもお話ございましたけれども、

学生カルテあるいは学生ポートフォリオと呼ばれるものになります。これについては随前から導入を検討しています。入学試験に始まり学生生活全般に関わる課外活動の状況なども含め、個々の学生の情報を集約して、それを基に各種の指導に役立てるということ、また、学生自身が自分のカルテ、ポートフォリオを見て、達成状況を確認していくということが非常に重要です。

こうした学習成果の可視化に関していきますと、個人情報の取扱いに関する懸念をどうクリアしていくかということ、それから導入コストです。学生生活を管理する部門が複数存在しますが、それら部署間での情報共有がシームレスに行える状況ではありません。現在は、各部署もそれなりにシステム化されているのですが、そのシステム自体がまた別々のシステムで、横につながっていないわけです。抜本的な解決策としては、全体として統一されたシステムを導入するということになるのでしょうか、そうしますと多額の導入コストというものは避けられません。

それから、これもお話が出ていたように、いわゆるその分野の専門スタッフを雇用して対応する必要があるだろうと思います。現状ではなかなか難しいであろうということです。

各種の稟議等もいまだにといいますか紙ベースです。押印も廃止には至っておりません。

一方、働き方改革ということが言われておりますが、事務部門は非常に苦勞しているように見えます。業務量が増えております。やはりDX化と言いますか、デジタル化に大きく踏み出さないとこれは解決しようがない問題だろうと考えます。

ここに御出席のほかの大学様の取組の状況をぜひとも参考にさせていただいて、本学も一歩前に踏み出したいと考えています。どうぞよろしく申し上げます。

以上です。

○アカデミー推進部長 鈴木様、ありがとうございました。

続きまして、中央大学副学長、佐藤様、お願いいたします。

○中央大学 御紹介を賜りました中央大学の佐藤でございます。

本日は学長が公務のため、副学長、佐藤からの報告で失礼いたします。

では、まず、パワーポイントを1枚めくっていただきますでしょうか。

中央大学におけるDX推進の諸側面につきまして、本日は研究、教育あるいは教育それ自体のDX化、地域・企業・社会連携ということでお話をさせていただきます。

次のスライドで、まず、研究でございますけれども、本学は8学部から成ります大学でございますが、いわゆる自然科学系、社会科学系、人文科学系、全ての分野に関わります学部がございます。そこで、1つ目は、DXに係る技術的側面の研究というようなことが重要になってまいります。これにつきましては、中心となりますのが理工学部、当区にある後樂園キャンパスでございます。例えばそこに挙げさせていただきましたような実際の研究テーマというようなことで、教員あるいは大学院生、学部学生が一体となる研究体制を組んでおります。

それから、後樂園キャンパスには、もう一つ、研究開発機構と申します産学官共同プロ

プロジェクトの受皿機構がございます。ここには多くの企業あるいは自治体も幾つか御参加いただいておりますけれども、そこに掲げさせていただきましたようなものがDX周辺で現に進行中のプロジェクトということになります。

例えば一番下の新常態環境下での情報セキュリティに関する総合的研究、これは私もこのプロジェクトの研究メンバーの一人でございます、私は法律が専門でございますが、法律制度面などについてはこんなところでも御一緒させていただいております。

次のスライドをお願いします。

本学は、先ほど申し上げましたように社会科学系の学部が幾つかございます。英吉利法律学校という名前で大学が始まりましたこともありまして、今でも法律系のところというのは大きなセグメントでございます、実は先生方は御存じだと存じますが、来年4月から、私ども法学部を文京区内に移転させていただきます。6,000名弱の学生が多摩キャンパスから文京区内、茗荷谷に移転させていただき、後樂園キャンパスと並びまして2つの大きな学部、実は理工学部というのも学内で大きな学部でございます、合わせますと1万名を超える学生が文京区内ということになります。

そういうわけで、法学系の研究を中心といたします社会科学系のもの、これも進めておりますが、これは当区ではなくて恐縮ですが、お隣の区になりますが、国際情報学部というのがJR市ヶ谷駅の前にございまして、これは2019年、コロナの前に設立いたしました。キーワードが「IT and Law」ということございまして、情報科学と法というもののクロスオーバーを学ぶという専門学部でございます。

あるいは情報法・知財・知的財産、あるいは地方自治・社会政策といった領域につきましては、法科大学院も御茶ノ水へ移転いたしますので、そういったものと併せていろいろなことをやっていきたいと考えております。

また、新しい組織を学内で幾つか設置させていただきました。1つは、もちろんデータサイエンスセンターでございますが、本学に特徴的なのは、ELSIセンターを設立いたしました。これはEthical, Legal and Social Implicationsというものの頭文字でございますけれども、新しい技術の社会実装に際して、法的・倫理的問題というものを考えるということで、私どもの大学の一つの特徴ではないかと考えております。

また、私自身が機構長を務めておりますけれども、教育力研究開発機構という組織も設置いたしまして、大学、高等教育におけるDX化の研究部門というものを学内に置いているところでございます。

次、教育へ進ませていただきます。

DXに係る人材育成は、いずれも大変重要なテーマということになりますけれども、なかなかDX人材というのは応用的で高度な能力を要求される、単にプログラミングができればいいというわけございませんので、非常に学際的な能力が必要になるということで、学部大学院の専門教育といったものと、それから、全学的なプログラム、先ほどお茶の水大学からも御紹介賜りました、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度という

ものを利活用いたしまして、これを全学プログラムとして進めるといようなことなどをやっております。

また、学部横断のプログラムというものを今後展開したいということで、都心、これが文京区と千代田区に分かれて置かれることになりましたが、このキャンパスの連携というものを進めていくということを今考えております。

また、人材育成につきましては、リカレント教育も非常に重要でございます。リカレント部門、私どももこれに大変力を入れておりまして、とりわけ当区との関係では、これも実はたまたま私が所長を務めております大学内の社会教育連携部分、クレセント・アカデミーと呼んでおりますけれども、当区の文京アカデミーと連携させていただきまして、文京区民の皆さんにプログラムを提供するといようなこともやらせていただいております。

3番目、教育自体のDX化というところに進みます。

これにつきましては、先ほど御紹介させていただきました、教育力研究開発機構というところが学内のフラッグシップ部門ということになっておりまして、高等教育のDX化推進というものを私どもはミッションの一つにしております。

そこで、手前みそで恐縮でございますが、1つ成果を御紹介させていただきますと、後でお手元の資料でURLを御覧いただければと思いますが、オンライン授業に際して留意が必要な権利、知的財産だけではなくて履修学生のプライバシーとか、非常に気を使うことが多いということで、これにつきましてオンラインコンテンツを用意いたしまして先生方に御覧いただくということをやっております。これは意外なことに、高等学校の先生方などに好評でございます、新しい時代におけるオンライン授業というのが初等中等教育にも影響を与えているところでございます。

それから、もう一つ、これは電子書籍でございますけれども『これからの授業デザイン・実践ハンドブック』というものを、ちょうどこの11月21日に刊行いたしました。お手元に、これは区のほうに大変御負担をかけましたけれども、印刷したものをお配りいただいております。これはウェブサイトで公開しておりますので、どうぞ御覧いただければありがたく存じます。

私のところにおります教育方法論の専門家などが力を合わせまして、新しいDX時代の授業のやり方について、実践報告例などを組み合わせて、先生方にグッドプラクティスを御紹介しつつ、法的規制、限界などがどこにあるのかということなどを示したものでございます。今後、今年度中といいましょうか、今月中には知的財産権の取扱いに関するハンドブック等も刊行いたしまして、これも全国の大学に共有できればと考えております。

このような形で、私ども、小さく始めたDX化の取組でございますけれども、こういった時代でございますので、それを私ども大学の内部でだけ利用するのではなくて、広く公開させていただいて、それによって御意見、御批判あるいはアドバイスをいただきながら、よりレベルアップをしていきたいと考えております。高等教育関係者の先生方だけではなく、自治体の皆様方、その他から様々な御意見をいただければありがたく存じます。

最後に、おまけで恐縮でございます。

おまけということで、Thank youの後に入っておりますが、茗荷谷駅の横に、もともと東京都交通局のバスの操車場といいたし、基地がございましたところに、土地をお借りいたしまして、今、このようなキャンパスがつくられております。外観はこのとおりほぼ出来上がっております、隣接しております跡見学園女子大学様にはいろいろとアドバイスいただきながら進めております。新しくキャンパスをつくらせていただくということで、またお仲間に加えていただくこととなりますので、よろしく御共同賜ればと存じます。

ついでにもう一枚だけ。

隣の区、千代田でございますが、ロースクールとビジネススクールはこちらに移転いたします。

どうもありがとうございました。

○アカデミー推進部長 佐藤様、ありがとうございました。

続きまして、筑波大学副学長、加藤様、お願いいたします。

○筑波大学 加藤でございます。

本日は、永田学長が公務のため、代理で加藤がお話しさせていただきます。

私は、筑波大学で総務人事・情報環境を所管しております。本学は最近で言うDX、以前で言うITに関して、開学以来、早くから取り組んでおりまして、教育における試みもかなり早いものです。本学は来年、開学50周年を迎えますが、開学時以来、全学で共通科目「情報」を2単位やっています。本学は、一般大学の理工系、文系に加え、体育、芸術、医学の分野も持っておりますけれども、そういう分野の方々も含めて全員が「情報」を50年前から学び、2単位必修というのが1つの本学の特色でした。

数年前からはデータサイエンスを強化しようということで、データサイエンスの内容2単位を加え、4単位が全学必修となっています。

さらにそれに加えて、学部3～4年次、修士、博士までを含めたトータル9年間、ピラミッド状に、上に行くほど専門的になる、9年間のデータサイエンス一貫プログラムをつくっているところであります。

それから、本学におきましては、ちょうど10年ぐらい前なのですが、教育クラウド室という組織を、学術情報メディアセンター、通常の大学における計算機センターの中に立ち上げております。実は私、初代の教育クラウド室長でして、この立ち上げに携わりました。そのころから全学的なLMS、学内外向けに授業動画を配信するオープンコースウェア(OCW)等をやっております。

それから、これも10年ぐらい前から始めたのですが、全自動で授業の動画を丸ごと撮るというシステムを40教室に配備するというのをやりました。筑波大学のキャンパスは広く、東京ドーム約55個分がつくば地区にあります。それ以外に文京区の東京キャンパス等があります。東京キャンパスも含めて、広大なキャンパスに分散した教室に自動収録設備を入れまして、教員があらかじめスケジュールの設定を事務経由でしておく、そ

の時間に教室に行って、パソコンをつなぐと自動的にカメラが入り、マイクが入り、収録が始まり、終わるとともにエンコーディングが行われて、翌日からネットワーク配信されるというシステムを作りました。

その後一気に状況が変わったのが新型コロナ対応でした。教室設置の設備は部屋数が限られます。コロナ対策をきっかけに、収録を各教員が自分のパソコンでするようになりました。配信はマイクロソフトTeamsとかZoomを使って、リアルタイム、あるいは、蓄積配信でやるように大幅に変わりました。

それから、このように教育にDXを入れながらやっておりますと、情報がいろいろと取れるようになります。これを組織的にシステムティックに収集分析して、教育に活用する教育IR(Institutional Research)という体制をつくるということをやっているところです。

それから、今から15年前の2007年頃から、文部科学省の大型プロジェクトで、医学ががんプロという呼ばれるものが始まりました。我が国の多くの医学部を持つ大学が参加しております。本学が中心となって、筑波大、千葉大、埼玉医科大の地域拠点で、eラーニングシステムを独自開発しました。これの評判がよく、他大学からも使いたいという要望があり、「クラウド化」して全国対応するというのをやりました。

予算の関係もあって参加大学数が増減するのですが、一番多い時で約100大学、現在は50大学ぐらいが参加しています。医学のみならず、看護、理学療法等、医学医療分野の教育で使われています。

さらに、これも多くの大学が関係していらっしゃいますが、文部科学省のスーパーグローバル大学事業というのがあります。同事業はそろそろ終わるタイミングですが、スーパーグローバルの活動を動画配信するプラットフォームとして本学が中心となって開発したのがJV-Campusと呼ばれるシステムです。

がんプロにしてもJV-Campusにしても、クラウド化することによって、人・物・金を集約することができ、雑用的なところは1か所が引き受ければみんなが恩恵にあずかるというようなことができます。JV-Campusでは特に、国際教育ということに重点を置きながら展開しています。

それから、事務系に関することも簡単に触れさせていきたいと思います。

本学におきましても、コロナで問題になったのは在宅勤務をどうするかということでした。そのときに問題になったのは、セキュリティと便宜性の同時担保をどうやって図るかということです。

これはなかなか難しい問題で、学内においてIT化はかなり進んでいますが、セキュリティのために閉じたネットワークになっています。VPNというものを使って、学外から学内ネットワークに接続することはできるのですが、日常的な環境は完全には再現しません。

これでどうしようかと思っていたところ、特に自治体関係者は聞いたことがあるかもしれませんが、本学OBの登大遊さんが作った、自治体テレワークシステムというのがあり、これを使うと、職場のパソコンの画面を非常に簡単に、安価、そして安全に自宅に飛ばす



ことができます。画面を画像として飛ばすので、データは自宅のディスクには残りません。これの活用を推奨しています。

もう一点、事務系におきましては、本学におきましても事務作業のDX化ということが非常に話題、課題になっています。実際に現場の話を聞いてみると、問題なのは、意外なことに、入力の部分にあることが分かりました。実は、コンピューターにデータがある書式で、特にデータベース化して入ってしまえば自動化はそう難しくはない。より問題なのは、ワードとかエクセルとかPDFでたまっている膨大な文書をどうしてくれるのか？という声が現場でありました。

それで、ワード、エクセル等のファイル添付で送るのではなくて、ウェブフォームを事務の皆さんがつかれるようにして、いわゆる発生源入力、ユーザーの方がいきなりそこにデータ入力して処理できるようにする、そうすると、RPA等の導入も非常にスムーズに行くということに気づきまして、それを推進しているところです。それと接続してRPAの活用も進めています。

先ほどのがんプロ等もそうなのですけれども、システム開発の際に業者発注をすると、ノウハウが自分たちのところにたまらないということがございます。ですので、できる限り業者発注は抑えて、職員自ら作るよう頑張ってみて下さい、最近は現場の人が使うツールが整ってきているので、と掛け声を掛けるようにしました。専門家に発注せねばならないところは当然ありますが、出来れば、職員の教育をしてもらうように頼んでください、とお願いをしました。つまり、ただ作ってもらうのではなく、どうやってつくるのかを教えてもらってくださいと。これは今のところまだ小規模のところから始めているのですけれども、結構うまくいっているようで、来年以降さらに拡大して、全学的にその活動を伸ばしていったらいいなと思っているところです。

○アカデミー推進部長 加藤様、ありがとうございました。

先ほどZoomの回線が切れておりまして、オンラインで参加していただきました皆様に音声が届いておりませんでした。申し訳ございませんでした。

続きまして、東京大学総長、藤井様、お願いいたします。

○東京大学 藤井でございます。本日はどうもありがとうございます。

DXと関係はないのですが、本学はウクライナからの学生・研究者の方々を25名以上受け入れております。11月24日には、駐日チェコ共和国大使館からのお申し出により、育桜会というNPO法人と協力の下、私どもの小石川植物園でウクライナへの連帯を表す意図で植樹式を行いました。その場には成澤区長にもお越しいただき、ありがとうございました。また、チェコ共和国がEU議長国ということで、EU関係の駐日代表者の方々などにもお越しいただきました。

DX関係では、2020年の4月頭からオンライン講義への移行が起こってきましたが、本日は学生さんたちが大きく関わってくれている特徴的なアクティビティを御紹介したいと思います。

1つは、ポストコロナを見据えた大学教育ということで、MOCHAというアプリのご紹介です。新型コロナウイルス感染症の流行が起こった当初に学生有志17名ほどが参画し、携帯のアプリとビーコンを組み合わせ、どの辺にどれぐらい人がいるかが分かり、コンタクトトレースもできるソフトウェアを製作いたしました。より多くの人に使ってもらうため、吉本興業とのコラボで、この接触アプリがどういう機能を持っているかを紹介するイメージもつくりました。

次のスライドは動画になります。このバーチャル安田講堂は実は学生たちがつくってくれたものです。その安田講堂の中で、高校生向けにオープンキャンパスで私が講義を行っているところです。

次の動画は国立情報学研究所の方々が、本学のVRセンターと共同してつくってくださった海の中のメタバースです。この二人の医学系の学生さんたちは、コロナ禍で保健所が非常に大変な状況になったときに保健所に入って、当初いろいろな情報を6種類のフォーマットにそれぞれ入力をしなくてはいけなかったのを、簡単なソフトウェアを使って、1つ入力すれば全部に情報が入るというようなシステムをつくって、保健所の業務を効率化しました。この動画は、メタバースの中でいろいろな対談をしたという例でございます。

このようなDXや新しいメタバースのようなツールは、学生たちにも積極的に参加をしてもらって作り上げてきました。教育にも生かしていくべく、最近広く報道されています。メタバース工学部は、メタバースという場を活用して、本学の学生たちのみならず、中高生、あるいは社会人の皆さんに対しても大学の教育が受けられるような形で参加をしていただくものです。ジュニア工学教育プログラムではメタバースをつくろうというプログラムがございます。また、私どもの教員と学外の方にも参加していただき、デザインと工学を掛け合わせた中高生向けのプログラムも動かしています。リスキリング工学教育プログラム、社会人向けのものについては、DX人材養成という目的で動かしております。

以上、簡単ではございますが私からの御紹介でした。

○アカデミー推進部長 藤井様、ありがとうございました。

続きまして、東京医科歯科大学学長、田中様、お願いいたします。

○東京医科歯科大学 東京医科歯科大学の田中です。

医科歯科大学はちょっと観点を変えて、環境面でのDXについてお話ししたいと思います。環境面というのは大学の運営の環境です。

5つお話ししたいと思いますが、まず、物品購入というのを教員がする場合に、今、普通に個人として購入する場合は、アマゾンとかそういうネット通販だと思うのですが、大学としては会計規則上禁止していましたがそれをぜひ使いたいという要望が結構あったので、規則の緩和とペナルティの強化を行ったうえで、ネット通販を簡便に行うための購買管理システムを導入しました。またこのシステムと財務会計システムとリンクさせて、予算管理や調達担当の事務の効率化も併せて行ったというのが1つです。

それから、RPAの利用ということで、今、藤井総長からもお話がありましたけれども、政

府のG-MISというコロナのシステムがあるのですが、そこに入力するのは膨大な項目があって大変で、それをRPAでやれないかということで、それを開発して導入いたしました。非常に簡単にどんどんデータを吸い上げて、G-MISに入力していくのを私も現場で見ましたけれども、非常にいいシステムだと思いますので、別に医科歯科大学の専売特許というわけではありませんので、ぜひお使いになりたい大学や保健所等がありましたら、御相談ください。

それから、大学病院というのはなかなか帰れないというのが特徴なのですが、すぐ帰れるサービスというのを導入いたしまして、これは会計業務なしでそのまま診察が終わったら帰ってしまうという仕組みなのですが、かなり好評で、順天堂大学も導入されたように聞いております。

それから、あと、テレワーク環境の整備というのは、自宅でできるような環境、テレワークができるような環境ということで、セキュリティーを保ちつつ、職場のPCにリモートアクセスできるような環境を整えたということで、今、テレワーク率は50%以上になっていまして、事務職員も大分少なくて節電にもなっているという状況であります。

最後は、来年度のことですけれども、入退館管理システムを一部変更して、身分証明書に加えてマイナンバーカードでも入退館できるようにするというので、これは政府のあれに沿っているのではないかなと思います。

以上です。

○アカデミー推進部長 田中様、ありがとうございました。

続きまして、東洋大学副学長、川口様、お願いいたします。

○東洋大学 御紹介、ありがとうございます。

本日は、学長の矢口が公務で来られません。申し訳ございません。代理で参りました。

では、スライドのほうを御覧いただければと思います。

幾つか紹介したいことですが、一番初めに、跡見学園女子大学の小仲先生がおっしゃってくださいましたが、東洋大学「教育DX推進基本計画」、こういうものを策定しました。その第1弾として、「東洋大学公式アプリ」というものを開発し、リリースいたしました。

あとの2つは、文科省の事業等々により、DX化の拡張を図っているということです。

次のスライドをお願いします。

細々といろいろ書いてありますが、「教育DX推進基本計画」というものをつくりました。いろいろと項目がございますが、教育、研究、その他、生活に至るまでDX化していこうということで、一番は、まず学生へのスマートな情報伝達ということを目指しました。スマートフォンに「東洋大学公式アプリ」というものを入れてくださいという取り組みを進めています。

学生は9割方利用していると思います。特に1年生は99点何パーセントということで、今の学生は、こういうものをリリースするとすぐ取り入れてくれます。

先日は、この使い方の一つとして、プッシュ通知で安否確認をするという2回目の実験

をしました。「今どこにいますか」とか、「大丈夫ですか」とか。そうすると、学内にいる人間に対して、どれだけの食料、水あるいは宿泊先を調達しなくてはいけないかというようなことをすぐ測定できるというような形のものをやってみました。

もちろん、そういうプッシュ通知は、それだけが目的ではなくて、学生サービスとして、まず、今日の授業はどこで行われるのかという情報が全部出てきますので、そういう意味で重宝されていると思います。

もう一つは、学生ポートフォリオというものにつなごうということで、自分で記録を残せるというような形になっています。たとえば、プッシュ通知によって、「今の気持ちはどうですか」とか、「今やっていることはどうですか」というようなものを、月に一度ほど問いかけがきて、それを入力すると記録がずっと積み重なって行って、学習の成果とかそういうものがどう変わるかというようなことも今取り組んでおります。

こちらもほかの先生方からも出ましたが、その膨大なデータをどのように解析して、学生サービスに返していくかということ、今ようやく着手し始めました。ワードのマップに、ワードというのとはどんなセンテンス、キーワードが出てきているかということですが、随時それが変化していくのが見られるようにするとか、いろいろなことを今工夫しつつ取り組んでおります。十分ではありませんけれども取り組みを進めているところです。これが非常に大きなベースになるシステムだと思っております。

もちろん、これは「教育DX推進基本計画」の第1弾でありまして、これがあと第4弾まで発展する予定なのですが、計画どおりにいくかどうかというのは、なかなか苦労しているところです。

2番目がリカレント教育の世界展開ということで、これは先ほどの第3弾、第4弾の辺りに当たるところです。筑波大学の加藤先生もおっしゃっていましたが、JV-Campusを使わせていただいて、本学のスーパーグローバル事業の後継のシステムの方策ということで世界展開を図っております。

また、もう一つ、これも良い例なのですが、略称でINIADと言っていますが、情報連携学部では、企業と連携しましてリスキリング教育をするということをやっております。それが次のページにある通りで、このような仕組みを今立ち上げて、これは非常に好評をいただいで動いております。

今まで良いことだけを申し上げましたが、実はやはりそんなに簡単ではございません。いろいろな問題を抱えております。そちらのほうも口頭ですが申し上げたく思います。

本学の学生数は3万1000人おり、多分この中で一番多い大学だと思っております。白山キャンパスには2万人おります。あの小さいところに、1つの町ぐらいの規模です。その中で、こういうシステムはいいとして、では、どうやって学生を教育していくのか、特にAI・データサイエンス教育、こちらはちょっと遅れております。

2025年になると、大体全部の学部でカリキュラムの改訂を行うのですが、そこまで待ってられないということで、できることはどんどん進めるために、来年度に向けていろいろ

ろなことを今仕込んでいるところです。

ただ、やはりとにかく急がないと、東洋大学の卒業生はAI・データサイエンスの思考やスキルが足りないと言われたらもうそれで終わってしまいます。10年後には3万の大学がなくなってしまうということになりかねないと、本当に危機感を持っておりますので、そこを今進めているところです。

もう一つは、事務職員の話ということで、いろいろな大学さんがおっしゃっていましたが、実は教員も含めてなのですけれど、やはり一番問題なのは、そういう教員、職員、要するに大人です、学生から見れば大人のほうの教育です。先ほどの危機感もそうなのですが、危機感が足りないことの裏返しだろうと実は思っています。もちろん危機感を持っている教職員も多いのだけれども、それが過半数かと言われると、あるいは事務職員もそうなのですが、多分過半数ではない状態です。だからFD・SD、そちらが実は一番の肝なのではないかと思っています。学生はもうデジタルネイティブに近いので、言えばすぐ何でも対応できます。ちょっと変な言い方ですけども、年寄り側の問題が大きいのではないかと、そちらの教育をどう進めていくか、それが肝ではないかと考えて進めております。ぜひお知恵をお借りできればと思っています。

以上です。

○アカデミー推進部長 川口様、ありがとうございました。

続きまして、東洋学園大学学長、辻中様、お願いいたします。

○東洋学園大学 皆さん、こんにちは。この4月から東洋学園大学に参りました。その前、筑波大に32年ほどおりました、東海大学を4年ほど経てやってきました。

東洋学園大学は、非常に先進的な大きな大学と比べると、文系の3学部、1研究科、3,000名弱の小さな大学ですので、あまり先進的なことはしていないのですが、現状を報告させていただきます。

まず、全ての大学と同じように、コロナ禍でオンライン化が進み、DX化が少しずつ進んだわけですが、本学はペーパーレス化を進めているという段階かと思っています。よく見れば、ペーパーを見ているのは、私、学長だけだったりして、周りは大分進んできているかと思っています。

教育の面では、どこの大学でも同じですが、LMSシステム、Campus-Xsというのを今年から導入しておりますし、それから、本年9月からは、いろいろ問題があるのではないかという声も先ほどから幾つか聞きましたが、ポートフォリオシステムを導入しました。ポートフォリオシステム、全学生が自分の記録、就職活動とかレポートとか様々なものを入れていくということで、学生にパソコンに慣れていただくということも非常に重要だし、それから、私は学長ですので、全ての学生のポートフォリオの一部分は見られるということで、時々チェックして、9月から導入したばかりなのでまだまだなのですが、どういう状況かを確認しながら進めているところです。

皆さん御存じのように、これはシステムが幾らよくても、学生がそれに慣れてくれなく

てはいけないし、それから、職員のほうは、自動的ではないですがいろいろな情報を入れていくわけですが、先ほどから言われたように大人の教職員といいますか、私のように年を取ってしまうとなかなか苦しいわけですが、そういう年配の教員も含めて協力してやっていかななくてはいけないという、3者の協力というのが肝かなと思います。

それから、学生サービスのDX化については、コロナ禍になって早速オンラインでの相談室を設けたり、LINEですね。学生は今ではEメールも見えてくれない時代ですから、いろいろなシステムでいろいろなメールが飛んでいくようにはなっているのですが、実際よく見てくれるのはLINEで、LINEも徐々にすたれていくのかもしれませんが、LINEを導入して、それでのいろいろなカウンセリングなども始めているところです。

それから、大学運営に関しても、理事をはじめペーパーレスで進めるということで、学長、早くキャッチアップしろということでございますが、かなり進んできているところです。昔だったら掲示板であるところが、みんなポータルサイトやデジタルサイネージになっておりますし、それから、ほかの大学も同じですが、教授会とか全ての会議の記録はデジタルに今はなっております。

それから、特に本学のような小さな大学にとって重要なのは、学生募集においてDXをどう使っていくかと。どこの大学でもデジタルパンフレットとかいろいろな紹介はデジタルにしているところですが、本学のような大学の場合だと、合格させた後、入学するまでが勝負であるというところもありまして、入学前のいろいろなトリビアとかいろいろなことを情報提供して、無事入学してくれるようにするというようなシステム、マーケティングオートメーションシステムというのを利用して、いろいろなタイプの志願者を取り、それに応じたインフォメーションサービスを行うようなシステムを導入しているというところがあります。

いろいろ先進的なお話をお聞きして、大変参考になっております。ありがとうございます。

○アカデミー推進部長 辻中様、ありがとうございました。

続きまして、日本医科大学学長、弦間様、お願いいたします。

○日本医科大学 日本医科大学の弦間でございます。

本学のDXの進捗状況ということでもありますけれども、まず、教育のコンテンツについては、医学部ではありますけれども、データサイエンス、AIに対する対応ということはさせていただいています。ただ、目的は、産業DXを牽引するような人材というのはごく一部、道はつくりましたけれども、基本的にはベースの強化ということでございます。

教育環境についてでありますけれども、私どもは別の理由、目的がありまして、6年前から全講義をeラーニングにいたしましたし、スモールグループラーニングについては、ICTにつながったBIG PADを使ってきたので、その問題点もはっきりしてきたかなと思っています。

というのは、まず、成績上位・下位者の差が、このウェブでの教育では出てくるかなと

思っております。上位はかなりすばらしい人材が生まれているように思うのですけれども、下位者も増えているという状況。正規分布というよりは二峰性みたいなものに近くなっているような状況でありまして、やはり、下位者に関しては、対面が適していると考えているところでもあります。

それからもう一つ、やはりサーバーの強化というのは、常にかなりしていかなければいけないということと、医学部における臨床実習はかなり重要と考えるのですけれども、かなりデリケートな判断をその都度させていただく必要のある状況です。アンドロイドやいろいろなものを購入してやっています。問題点としてはまだあると思っています。

業務についてでありますけれども、基本的にはウェブ会議等については、セキュリティと利便性が相反するように思っておりまして、今の段階では、先進の科学的成果、あるいは個人情報を含んでいるウェブ会議のシステムと、利便性だけを追求すればいいものを分けているのと、ペーパーの、3段階で進めているという状況でございます。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 弦間様、ありがとうございました。

続きまして、日本社会事業大学学長、横山様、お願いいたします。

○日本社会事業大学 日本社会事業大学学長の横山彰でございます。

本学は、1946年、政府からの委託を受け、日本初の社会福祉ソーシャルワークの専門教育機関として創立した私立大学です。メインキャンパスは清瀬市にありますが、文京にサテライト型のキャンパスを有しております。

本学のDXの推進状況について、まず初めに御報告しなければならない点は、その意欲はあるのですが、進捗は必ずしも十分な状況とは言えないというのが現時点での評価でございます。

そして、第4期中期計画、令和4年度から9年度にかけて、ICTに関する様々な推進を進めようということで計画は立ててございます。

それから、令和4年度の事業計画としては、今ある既存の情報システム、LMSの更新をしようということで取り組んでおりますが、それぞれの部門でベンダー、業者が違うということもございまして、いわゆるベンダーロックインという状況で、本学全体としてのシステム設計がなかなか難しい。それぞれの既存のシステムをどのように統合していくかということについて、更新の今、そういう問題に直面しているということでございます。

それから、学校のITガバナンスの構築というものが必要だということを認識しておりまして、その整備をしようということで進んでおります。

以上が、教学部門の教育研究、また、事務部門の取組でございますが、本学が研究領域でどのような社会的貢献ができるのか、また、そういう可能性はどうかということについて、最後にお話ししたいと思います。

本学は、先ほど御紹介しましたように、福祉分野における専門単科大学で、かなりの実績を上げていると自負しております。こういう点で、プログラム評価いわゆるエビデンス

に基づく福祉課題の解決・政策提言と介護ロボットに関する活用などの研究活動で、福祉分野におけるデジタル化を通じた新たな価値創造に寄与したいということで、DX時代における社会貢献を目指しているところでございます。

私からは以上でございます。

○アカデミー推進部長 横山様、ありがとうございました。

続きまして、日本女子大学学長、篠原様、お願いいたします。

○日本女子大学 日本女子大の篠原です。よろしくお願いいたします。

教育研究環境の分野と、そして、事務部門の分野の2つで簡単に御紹介をさせていただきます。

教育環境のほうでは、インターネット回線の増強や計画的なLANの設置、全教室ICT機器のハイフレックス型授業への対応、Zoom包括契約を行っています。本学はZoomとTeamsとLMSと、その3つを連携しながら使うようになっていきます。それから、出席カードのウェブ機能というのを構築いたしまして、これから使い始めるというところでございます。様々な学生サービスというところで、コンピューター演習室の予約やキャリア支援の面談の予約などがウェブからできるように整備いたしました。

もう少し大きなところで言いますと、eポートフォリオを導入いたしまして、1年生から全員に展開をいたしております。

そして、全学的な基盤教育では、AI、データサイエンス、ICT教育認定プログラムを設置しています。この科目群は、文部科学省が定める「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定されておりますので、その一つ上を目指して、今、整備をしていこうと考えております。

また、それぞれ学問分野の中で、ICT化、DX化を進めていますが、2024年開設予定（構想中）の建築デザイン学部（仮称）におきましては、コンピューテーショナルデザイン、これは今でも行っておりますが、そのアドバンスのクラスを強化していこうと考えております。

遠隔授業も、基本的に教養科目はごく一部を除いて遠隔授業としましたが、これはいろいろあって少し見直しを図っていこうというところで、今、次の年度に向けて整備をしているところでございます。

事務部門のほうでは、電子稟議を始めまして、今、事務局起案のものは8割方電子稟議になりました。教学のほうはちょっと遅れております。また、各種会議資料の電子化、教職員のICTリテラシーの向上を目的とした研修会の実施等、比較的基盤的なところを整備しているというところでございます。

時間も時間でございますので、ごく簡単に申し上げました。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 篠原様、ありがとうございました。

続きまして、日本薬科大学副学長、都築様、お願いいたします。

○日本薬科大学 日本薬科大学の都築と申します。



文京区の湯島三丁目に小さなキャンパスがありまして、日本で最初に漢方薬学科を設置しまして、健康、漢方、医療、こういった人材養成、並びに文京区をはじめ21の自治体と包括連携協定を結んでおりますので、そういった人的、物的資源を地域と一緒に盛り上げる活動をしている大学でございます。

今年のテーマはDXということで、会場にいらっしゃる方々には、この紫の冊子、こちらは大学のパンフレットではなくて、日本マイクロソフト社が、昨年度、営業マン全員が使っていたパンフレットになります。なぜこのパンフレットに採用いただいたかといいますと、2020年4月、日本薬科大学は日本の大学の中で一番最初に全学オンライン授業、これをライブで行いました。

ただ、これは美談ではなくてしくじり体験でございまして、当時私たちの学校にパソコンがほとんどなく、また、Wi-Fi環境もほとんど整っていませんでした。ほぼ皆無でした。そして、こんな大学はないと思うのですけれども、システム担当の事務職がたまたま辞めてしましまして、システムを担う人間がいらないというないないづくしの状態でした。ただ、目の前には学生がいます。コロナ第1波であります、待っていても私たちの教育は永遠にできないと踏みました。そこで、とにかくやってみようということで、いの一発で始めたということになります。

そうすると、当時、オンライン授業というのは誰もしていませんでしたので、NHKさん、日経新聞さん、様々なメディアから取材を受け、そして、最後に連絡があったのが日本マイクロソフト社の役員の方でした。

その私たちの取組を見て、これはひどい取組ですねと。ただし、私たちはもっとひどい公立の小中学校に対してGIGAスクール構想を行っていかねばいけない。その中で日本薬科大学さんのこのひどいモデルは参考になるということで、私はモデルに採用いただきまして、1円ももらってはおりませんが、このパンフレットに複数回載せていただきました。

その中で感じたこと、大事なことが3つありました。これは精神論であるのですが、これが僕はDXの肝だと思っています。

1つ目は、組織として失敗に寛容になることです。

どうしても大学行政、失敗したらどうしよう、失敗は許されないということで二の足を踏んでしまうことがあります。しかし、新しいことにチャレンジするからには失敗はつきものです。そこで、失敗したときに「何でだ」「誰だ」ということではなくて、どうやって次に進めるだろうという、その失敗への寛容性が一番大事だと思っています。

2つ目は、大学で言うと学長、理事長、そして、行政で言う首長さん、この方がいかに決意、覚悟を持って実行するかということだと思えます。

そして、3つ目です。

今回のテーマはDXですが、先ほど東京大学の藤井先生からお話がありましたが、私どもは地域連携を得意としている中で、吉本興業さんとも一緒に番組をつくっていることがあ

ります。そこで大崎会長はこう言われていました。「デジタル化とDXは全然ちゃうで」と言われました。この違いが私はしっくりきました。百貨店で言うと三越さん、伊勢丹さん、メインは店寄りです。そして、お歳暮商戦は一部オンラインでやっています。ところが、アマゾンさんというのはメインはオンラインです。一部ハワイにありますホールフーズ・マーケット、これもアマゾンが経営していますが、これは店寄りです。そこでのデータをいかに使ってオンラインに活用するか。要は、主をどちらに置くかというところがDXと思います。

私たちがやってきたことはデジタル化でした。主は対面、そして、副をオンラインでやっていました。ところが発想を、主をオンラインに置いて副を対面ということにやると、全ての発想がどこまでやっていいかという限界が見えてきます。だから、徹底して、この2年間は何でも許されるだろうということで、失敗したら学生に謝りながらこのDXを推進してまいりました。

授業の中では、昨年度は全ての授業を予習型に変えました。反発もありましたが、知識は家でもできるだろうということで、専任の教諭は、まず、予習型の教材を5分でも10分でもつくって、習熟度が違う学生がおりますので、授業中は学力が違う学生をフォローしていく形の授業に変えました。

そして、政府は、今、10兆円ファンドと教育に対する予算を重点的に置こうとしておりますが、私どものような小さい大学が全く蚊帳の外の話でございます。その中で私学として生き残っていくためには、やはり国際化、そして、社会人の学び直しを取っていかないと駄目だろうということで、この辺りもこの3年間、徹底して推進しました。

まず、グローバルな話ですが、留学生は、当然渡航もなかなか難しい状況でした。オンラインで様々なプログラムをやったところ、1年目、2020年も60人、そして、昨年度は1,000人近い学生がプログラムに参加しました。そして、社会人のところ、今、政府がリスキリング、リカレントというように推進していますが、本当にうまくいくのかという中で、大学が真剣にこれに取り組む必要があるのではないかと私たちは考えました。その中で、私どもには漢方、健康、美容、女性たちの学び直しに最適のツールがございますので、これを徹底して推進しようということで、文部科学大臣の認定も取りながら履修証明プログラムを置いております。

皆さん、学び直しをやる時に何を参考にされるでしょうか。例えば、居酒屋に行くとき、レストランに行くとき、食べログ、ぐるなびを参考にされると思います。旅行に行くときは楽天トラベルを見るかもしれません。実は、文部科学省も学び直しのサイトを予算投下し、つくっています。マナパスと言われるものです。文科省がやっているのでもまいち知名度が低いのですが、もしよろしければ皆さん、携帯でもパソコンでも御覧ください。

このサイトのすばらしいところは、地域、予算、そして、場所、これも書いてあるのですが、ランキングがちゃんと出ているのです。文系ランキング、理系ランキング、医療ランキング、全部ランキングが出ています。現在、多くの部分でトップは放送大学さんです。

それから、私がライバル視しているのはお茶の水女子大学さん、日本女子大学さんです。文京区には、このようにリカレントの団体ランキングでも、これはアクセスランキングですね。満足度ではないのですけれども、そういった非常に強いツールを持っている大学がたくさんございます。そういった大学さんとも連携を図ることができるのが、このDXの強みなのではないかなと感じているところでございます。

つい最近発売になりました地方自治の業界誌、月刊『ガバナンス』で、成澤区長が大学との連携を熱く語っておられます。もちろん、文の京、文京にとっても大学は資源かもしれませんが、私たちがDXでつながることが、さらなる価値を高めるのではないかと私は切に思っております。

そして、最後になります。

今年の流行語の一つで「青春って、密なので」という言葉がありました。今回、こうして対面で学長懇談会ができることも、大変今後の連携にとって大きいことだと思います。その前提として、先生方、もちろん教職員、学生たちが健やかな生活を送ることだと思っております。そうしたことも考えまして、日本薬科大学謹製のお屠蘇、これは古来三国志の時代に華佗という御殿医さんがいたのですが、曹操に進呈した手法がまだ残っております。それを日本薬科大学の教職員、さらには学生たちで皆様方のために生薬を刻んでつくったものでございます。ティーバッグのようなものになっております。これを日本酒、みりんに大晦日につけていただくと、1月1日、皆様、御家族で健やかな1年が過ごせると思いますので、お楽しみいただければと思います。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 都築様、ありがとうございました。

続きまして、文京学院大学学長、櫻井様、お願いいたします。

○文京学院大学 文京学院大学の櫻井でございます。

本学は、4学部10学科、5つの大学院を擁しております。キャンパスとしては本郷キャンパスと埼玉のふじみ野キャンパス、2キャンパスを擁しております。

それでは、本学のDX推進について御報告をさせていただきます。

次のスライドをお願いいたします。

概要は、このような内容になっております。

次のスライドをお願いします。

まず、DXを進めるに至った経緯ですけれども、私どもの大学も、それほど早い段階からDX推進ということは行っておりませんでした。やはり2020年4月のコロナの対応ということで、本学においても全面オンライン授業という形での移行をいたしました。Teamsなど幾つかの仕組みを併用しております。教員の、特に専任、非常勤のトレーニングにも尽力させていただきました。

その流れから、昨年4月にDX推進プロジェクトチームを立ち上げて、9月に答申を作成していただきまして、その答申に基づいて、今、進捗をしているというような状況でござ

ざいます。

これを進めるに当たって、改めてDXに関して組織化をいたしました。それは次の2つのチームの構成ということになります。

1つは、DX施策を具体的に推進するためのセンターを設置をいたしました。もう一つが、DXの将来像を検討するワーキンググループの設置をいたしました。

特に、ワーキンググループについては、スライドにもありますけれども、教職協働という立場から、これはむしろ自薦ということで手を挙げていただきました。思った以上に教員からも職員からも手が上がったというのが、私としても大変よかったなと思っております。12月ですので、それぞれ年次の報告を今まとめつつあるというところでございます。

それでは、次のスライドをお願いいたします。

実際の施策について申し上げますと、大きな目標は、学習者本意の教育と生涯にわたるキャリア支援ということが言えるかと思えます。そのための施策の概念図が、今、このスライドに映っているとおりでございます。

特に今年度は、色づけされた施策を中心に現在着手をしております。

具体的には、次のスライドをお願いいたします。

1つ目が、学修ダッシュボード。

2つ目が、Google Street Viewによる実験設備の公開。

3つ目が、デジタル証明書。

4つ目が、AIチャットボットによる24時間情報サービスということになります。

これらを表にまとめたのが次のスライドになります。

まず、学修ダッシュボードについては、これは先ほどできておりますようにLMSで提供しております。本学のB'sLINKで実装、提供も開始しております。これによって個々の学生の成績とか、あるいは単位の取得状況について学部として把握ができるということになります。

2つ目のGoogle Street View、仮想空間の活用ということですが、Google Street Viewを使うことによって学内設備の紹介をしております。

例えば、具体的にはオープンキャンパス等々で学生募集をするときに、特に、今、入場者を限定しておりますので、そういう際に、ある程度大学に来られない高校生に学内設備を見ていただくと。そのためのツールとして使っております。あるいは、入学前教育で仮想空間を活用しているというようなことでございます。

3点目は、学修履歴のデジタル証明書の発行ということですが。

現在はまだ証明書の発行機ということで、いわゆる紙で発行してございましたけれども、その後継の機種にデジタル証明書機能を搭載する予定で今進めております。こうすることによって、学生はスマホから証明書の発行ができるということになります。

4つ目がAIチャットボット。これは事務部門で1月よりサービス開始ということで、今、準備が最終段階に来ております。

これは特に、履修の時期になりますと、学生から履修の仕方等々、ガイダンスはやるのですけれども、どうしても細かいところについて教務グループの方に質問が殺到するわけです。その対応だけで実は教務がかなりの時間がそがれるということになりますので、ある程度それを定型化することによって、学生の質問に対してAIチャットボットを使うことによって、そこで、いわゆる質問に対して答えると。そういうことによって事務部門の学生対応の時間が増やせるということで、できるだけ学生対応の方に実際の時間をそごうということで、今年着手したところでございます。

最後、次年度におきましては、今年度の施策を基本的には継続をしていきたいと思っております。

具体的には、1つ目がオンライン学習基盤のさらなる整備。

2つ目が、学生サービス。この24というのは24時間、7というのは1週間ということですが、日本では24時間365日と。フルにわたって学生サービスができるような体制を構築していきたいと考えております。

3点目は、学生の活動空間の拡大ということで、これはさらに仮想空間をより多く使っていきたいと考えているところです。

4点目が、ウェアラブル端末の教育活用ということで、こういう端末を使うことによって教育をさらに向上させていきたいと考えております。

このような形で、次年度等についても、できるだけスピーディーに、そして、また前進をさせていきたいと考えております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 櫻井様、ありがとうございました。

続きまして、放送大学学長、岩永様、お願いいたします。

○放送大学 ありがとうございます。

では、時間も大分過ぎておりますので手短に。

放送大学は、こちらにいらっしゃるどの大学とも違っている異質な大学だと思うのです。よく昔の大学院の仲間などからも、放送大学はコロナで一人勝ちだろうと言われたのですが、全然一人勝ちになっていないのはなぜかなと思ったのです。

要するに、放送を使っているというのは、これはデジタルではなく、先ほど筑波大学さんのほうから創設50年というのがありましたが、放送大学は来年で創設40年になりますが、40年前の最も進んだアナログシステムだということを最近自覚しております。現在に至るまで、放送大学が最も進んだアナログシステムであることにしがみついております。これをデジタル化しないことにはどうにもならないというのが今の率直な気持ちです。

皆様方の方向性とはまるで逆になるかもしれませんが、放送大学では、DXでどれだけリアルな伝統的大学に近づけるかというところを目指しております。今まであまりにも進んだアナログシステムをやってきたものですから、ここが一番難しいところかなと思っております。

次、お願いします。

放送大学というと年寄りの大学と思われているかもしれませんが、18歳、19歳、20歳の学生と比べれば確かに年寄りなのですけれども、意外にも30代まで、あるいは40代までの人が過半数を占めておりまして、10代、20代もそんなに少なくないという最近では比較的若い大学で、生涯学習機関としては若い大学になっているということです。

こちらの図でもわかりますように、コロナになりましてから若年者の増加が目立っております。そういう意味で、やっと皆様の大学の競争相手の一番末ぐらいには入れていただきたかなというところなんです。

次、お願いします。

放送事業の視聴方法ですけれども、その若い人たちが増えたということもありまして、実はインターネット配信で視聴している、放送事業は全部インターネットで見たり聞いたりできますけれども、実は8割ぐらいの人が、これは2年前ですけれども、現在では9割近い人たちがインターネット配信で見ているのではないかと。要するに、放送というものの重要性が大分薄れてきて、リアルタイムに視聴している人は、34歳以下では1%にすぎないということが出ております。

次、お願いします。

放送大学で唯一対面型の、人間と人間がリアルに接触する部分が面接授業なのですけれども、その他にも卒論指導とか集団指導がありますけれども、一応全体としては面接授業が唯一。それすらもコロナではうまくいかなくなりましたので、右のようなZoomを使った授業とか、それから、下のほうは、学習センターと学習センターをつないだハイブリッド授業なのですけれども、こういったようなことが進んでおりまして、今や面接授業もある意味では大変革をしているというところだと思います。

次、お願いします。

このライブWeb授業というのが、実は、1つの学習センターから全国へという全く新しいベクトルを持った授業なのですけれども、これを試行的にやったその結果を聞きますと、9割弱の人たちが、これからはこれを受けたいと。こういう形で受けたいと。その理由は、そこに書いてありますように、外出しなくてもいいとか、ハンディキャップの方が遠いところまでいかなくても済むというようなことがあります。非常に好感を持って受け入れられていると。

次、お願いします。

通信指導提出というものがありまして、これは従来は、放送大学の親は2つありまして、1つは文科省なのですけれども、もう一つは総務省なので、総務省のほうにもいい顔をしなければいけないということもありまして、通信指導は郵送でした。その郵送が学生からはやはり面倒だということで、近年、特にウェブ率が急進しておりまして、恐らくこれからは9割以上が通信指導もウェブになっていくと思います。

次、お願いします。

今年度一番大きな出来事が、単位認定試験という各学習センターとサテライトで57か所でやっていた単位認定試験を集めてやっていたものを、全てIBT化しました。自宅で受けられると。

次、お願いします。

これは何でもないことのように思いますが、全ての数が18万2906科目人と言ったらいいのでしょうか。延べでこれだけです。ユニークユーザーでだと5万人です。これをたった1週間ぐらいで全部こなすということは大変な事業でした。これは随分苦勞もしましたが、何とか無事にやり遂げることができました。

どうしてもPCが使えないという人たちもいますので、学習センターでやることを最終的なセーフティーネットにしていたのですけれども、1,000人弱でした。ということは、18万分の1,000ということなので非常に少なかったのではないかなと。後の評価を聞いても、便利だったとか、出張先でもできたとか、ハンディがあっても受験できた、楽だったというようなことを受けています。

次、お願いします。

私が学長になってからVision2027というものをしましたけれども、その中で、近未来を出しております。近未来像というのをしましたけれども、そのうちの半分ぐらいはDXに関することです。オンライン科目を拡充する、それから、ライブWeb授業を採用する、単位認定試験の完全Web化を達成する。それから、大学運営の全場面でDXを進める。

実は、放送大学はいまだに授業料の納付が郵便局でしかできないという、いつの時代だということになっているので、学生からの不満も多いのですけれども、ここを少なくとも私の目の黒いうちの前半ぐらいで何とかクリアしようかなと思っているところです。少しでも皆さんに追いつければなというのが放送大学のDX化の現状だということです。

どうもありがとうございました。

○アカデミー推進部長 岩永様、ありがとうございました。

皆様、ありがとうございました。本日の議題は以上となります。

それでは、成澤区長より閉会の御挨拶を申し上げます。

○東京大学 その前に一言だけよろしいでしょうか。

○アカデミー推進部長 どうぞ。

○東京大学

文京区内の大学が連携して、サステナビリティ、グリーントランスフォーメーションに関して動けないかということで、成澤区長からもお声がけをいただいているところですが、お茶の水女子大学、東洋大学、日本女子大学、日本薬科大学にお声がけをして、本学と共同で、現状の取組の御紹介と交流、意見交換をしようという会を12月21日の15時から開催いたしますので、この場でアナウンスをさせていただければと思います。区内の大学にはそれぞれ通知を差し上げるようになっておりますので、よろしく願いいたします。

時間がタイトなところ恐縮です。

○区長 藤井総長、ありがとうございました。その日は私も御挨拶に伺いたいと思っています。東大の福武ホールと聞いておりますが、GXに対する大学共通の取組をこの地でスタートさせていただきたいと思っております。

時間を大幅に超過しまして恐縮でございます。私から最後に3点だけ。

事務改善について、それぞれの大学での取組は、私どもも参考にさせていただきたいと思えます。本当にありがとうございます。

それと、幾つかの大学からリスクリングについてのお話でしたが、DXとの親和性も非常に高いと思っております。政府も5年で1兆円と言っていますが、大学の多いこの地における取組もとても大切だと思っております。

中小企業向けには、私どもの経済課を通して補助制度がありますが、ぜひ新年度に向けて、それぞれの大学でのリスクリングのお取組、恐らく新年度スタートの新しい取組もあろうかと思えますので、一度実務担当者の方に調査をさせていただいて、区内の企業ともつなげる努力をさせていただきたいと思えます。

それと、今、天津から来ている私の友人が、中国で最もDXが進んだのは、いわゆるオンライン教育ではなくて、今日冒頭にお話のあった実験とか実習とかをXR（クロスリアリティ）を使って、最も駄目だと言われていたところに踏み込んでいる、実績が上がりつつあるという話を聞きました。日本に売り込むために調査に来たと友人は言っていました。ですので、我々も負けてられないので、オンライン授業等を乗り越えて、実験とか実習だとかにクロスリアリティを活用して、この地からいろいろな発信ができればなと思えますので、今後とも取組に御協力いただければと思えます。

今日はありがとうございました。お忙しいところ恐縮でございます。

○アカデミー推進部長 以上をもちまして、区内大学学長懇談会を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。